

当院の看護研究の紹介

脳神経センター阿賀野病院 看護部

捧 裕子, 杉本 渚, 落合 美恵子

私達は、第56回 日本神経学会学術大会で「食べる楽しみを援助する～摂食・嚥下カンファレンスの事例から～」と題して研究結果を報告しましたので、ご紹介いたします。

1. はじめに

脳神経センター阿賀野病院では、看護師、看護補助者、管理栄養士、リハビリテーションスタッフ (PT, OT, ST) が、嚥下障害のある患者に対して、摂食に関する問題の情報共有とチームアプローチを目的として摂食嚥下カンファレンスを開催しています。

今回、頻繁に摂食嚥下カンファレンスを行い、肺炎を繰り返しながらも経口摂取を維持することができた事例を経験しました。本例では、患者の主介護者であった配偶者への対応に重点を置き、チームで統一した対応を行うことにより、種々の問題を解決することができました。本例を通じ、チームでの協力の必要性和その成果を実感することができました。当院における、神経難病患者が食べる楽しみを維持するための取り組みを紹介させていただきます。

2. 事例紹介

患者さんは、罹病期間17年の70歳代のパーキンソン病です。当院に入院時より頻回に肺炎を合併し、経口摂取が困難な状態が続いておりました。また、精神症状、ウェアリング オフ、起立性低血圧を合併しておりました。キーパーソンは患者さんの配偶者でした。

3. 経過と摂食嚥下カンファレンスの展開

経過のまとめを図に示します。

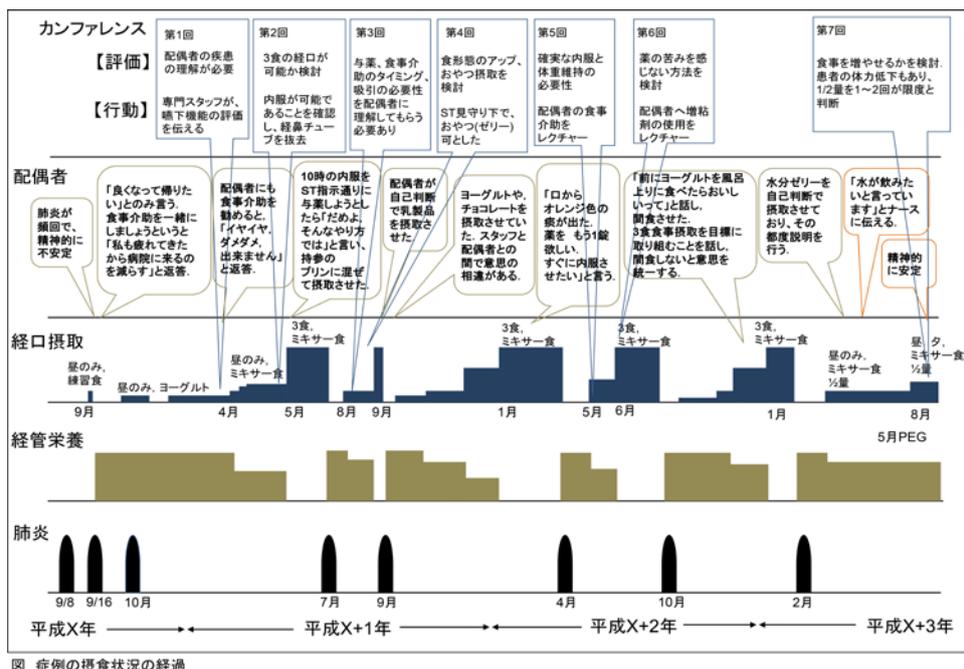
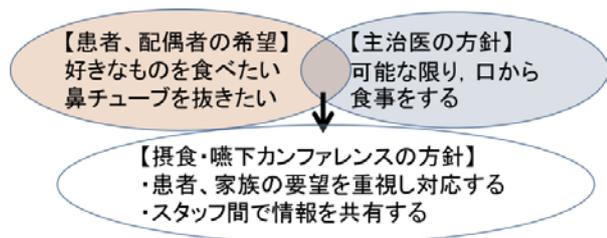


図 症例の摂食状況の経過

4. 本例の方針



5. 本例の問題点と対応

(1) 看護スタッフの人員不足

言語聴覚士(ST)が、摂食と介護のポイントを説明する機会を何度も設け、患者さんに接するすべての職員に統一した介助を行うことができました。

(2) 配偶者への対応

病状が悪化すると、配偶者の精神状態も不安定となりました。そのため、キーパーソンである配偶者に対して、下記の事項を実施しました。

- ・配偶者への精神的支援
- ・患者さんの嚥下機能の客観的評価の説明と理解
- ・最終的には経管栄養による全身管理の必要性の説明

6. 考察とまとめ

本例では、摂食嚥下カンファレンスの役割として、患者さん自身の嚥下訓練や食事介助のみならず、主介護者の配偶者に対して、いかに対応するかという点においても、非常に重要な役割を果たしたと考えています。本事例の課題をまとめると、下記の通りになります。

- (1) 患者本人、および配偶者が経口摂取を強く望んでいるが、嚥下機能の点からは難しい
- (2) 配偶者の摂食に対する思いがあまりに強く、現実には即していない行動を起こしてしまうことがある
- (3) 配偶者の思いと、医療スタッフとの見解のずれ

これに対して、私達は摂食嚥下カンファレンスを有効に利用することとしました。各職種により得意分野や役割分担が異なる他職種が一同に会して相談することにより、患者さんに関わるスタッフ全員に意思や方針を統一し、共通した問題意識を持ち、対応することができます。さらに各専門職から見た患者像を話し合うことにより、他職種の取り組みがわかり、より患者が抱えている問題を明確化し検討することができました。スタッフ自身が抱く疑問や問題点もスタッフ全員で共有することにより、スタッフ全員が自信をもって患者さんや家族に接することができるようになったのではないかと考えています。

また本事例では、配偶者に対しても、摂食嚥下カンファレンスを通じて細やかに対応することを心がけました。入院当初は、配偶者の摂食に対する非常に強い思いと、現実の嚥下機能とのギャップに、配偶者自身が悩み、配偶者の自己判断による摂食介助を行っていたことがあり、患者さんの嚥下機能の改善へ結びつかない行動をする状態が続きました。その過程の中で、医療スタッフ側は、配偶者へ嚥下機能や介助方法など客観的な情報提供のみならず、精神的なサポートにも配慮しました。その経過、配偶者も時がたつにつれて、医療スタッフ側との意思疎通が図られるようになり、配偶者の精神状態も徐々に安定してくるようになりました。

本事例は、最終的には3食の経口摂取を継続することは困難でしたが、胃瘻による流動食と少量の経口摂取を継続することにより、患者さんの栄養状態を良好に維持することができるようになりました。これは、医療スタッフが摂食嚥下カンファレンスを通じて、チームでアプローチしたことがこのような結果を導き出

したのではないかと考えています。